日赤看会誌　J Jpn Red Cross Soc Nurs Sci Vol.20, No.1, pp.165–166, 2020

第20回日本赤十字看護学会学術集会

シンポジウム

産婦の潜在力を最大限に活かす助産ケアの伝統と革新

Tradition and Innovation of Midwifery Care

中根　直子　Naoko Nakane　（日本赤十字社医療センター）

キーワード：助産ケア，助産師外来，分娩介助手順，女性中心のケア

key words：midwifery care, midwifery clinic, midwifery maneuver, women-centered-care

I.　背景

日本赤十字社医療センターは，1922年（大正11年）に日本赤十字社産院（以下，産院）と付属産婆養成所（現・日本赤十字社助産師学校）を併設して以来，我が国の助産をリードする存在として技術やケアを発信，伝承してきた．以来，97年の歴史の中で出産や女性をめぐる社会状況は大きく変化し，同時に周産期医療の発展に合わせて助産ケアも変革を続けている．本稿では，本学術集会のテーマである「看護の本質にこだわり，当たり前のことを続ける」という視点のもとに，助産ケアの本質を求め，伝統と革新を続けてきた当センター周産期部門の変遷の過程から今後の課題をひもとく．

II.　伝統

産院時代は年間4,000件に迫る分娩数を背景に，豊富な実践力と卓越した技術を持つ助産師集団が存在した．とくに分娩室は，新人助産師の現任教育に加え，毎年40人の付属助産師学校（以下，助学）の学生が実習を行うことを前提とし，技術伝達による助産ケアの質の均一化が徹底されていた．全国から集まった学生は1年後には各地の病産院で「日赤方式」の分娩介助手順を広めることに貢献した．

1972年，産院は日本赤十字中央病院と合併し，日本赤十字社医療センター（以下，当センター）が設立された．初代院長は大学の産婦人科教授だった医師で，正常妊娠や分娩には助産師が専門職として主体的に関わることを推奨し，「助産師(婦)外来」を全国に先駆けて開設した．院長が助学の学校長も兼任するという組織的特徴もあり，助産師外来の設置目的のひとつは「助産学生の教育」だったとされている．助学の専任教員も，妊婦健康診査や分娩介助に直接関わって実地教育を行っていた．とくに，正常分娩に関しては，その母子を担当助産師が責任持って介助することが求められた．当センターでは，現在でも出産時に産科医師を「お立ち会いです」とコールするのが常であるが，これは文字通り医療処置が不要で，立ち会うだけであった当時の名残である．かつての助産師たちが，いかに高い自律性のもとに業務を行ってきたかが伺える．

III.　革新

理解ある産科医師との協働体制によって，産学協働のシームレスな教育体制が当初から整っていた当センターは，助産教育として稀な環境を持っていた．一方で，分娩介助や助産ケアの内容は，分娩数に比して少ない医師，看護師，助産師の業務を効率よく行うことを目指して「手順」が重視されたものも少なくなかった．また，「努責は大きく吸った息を止めて長く」「出産後は2時間仰臥位で安静の後に導尿」など，医学的根拠というより決められた慣習も多くあった．当センターはラマーズ法に代表される「精神予防性無痛分娩」に70年代から取り組んでいたが，80年代にマタニティ雑誌を中心に広がった結果，目指していた「産婦の主体性」より，「呼吸法パターンの習得」として受け取られた傾向がある．

1980年代後半，妊産婦が自ら主体的に出産に参画す

ることを推奨する潮流が欧米から入ってきた．自由な分娩体位での出産へ対応するには，助産師自身に「フリースタイル」な態度と，独創的な技術が求められた．分娩に関する医学的根拠（EBM）が明らかになるなかで試行錯誤を続けた結果，当センターは母体救命から水中出産までに対応できる稀有な総合周産期母子医療センターとなっている．

一方，女性の社会進出が一般的となり，妊婦の高年齢化，合計特殊出生率の低下，核家族が当たり前となった社会構造の変化で母子を支える仕組みも変化した．この10年で，医療施設として無過失補償を行う産科医療保障制度の整備と，産科診療ガイドラインの遵守で安全性を担保されるという構造へ変化したことは大きい．

IV. 考察

助産ケアは，医療者が提供することが当たり前という価値づけから，当事者が主体であるという発想の転換を機に大きく変化し，医学的根拠に基づいて深化してきたといえる．一方で，インターネットの普及やPC，スマートフォンが一般化し，出産世代は簡単に個人レベルで情報を得て選択する時代となった．妊娠出産という生理的変化に対する受け止めも多様化し，当事者は目先の快適性に左右されやすくなっている．生命倫理に関する選択も含めて，女性にとって「本当に何が良いのか」を意思決定するには困難性が高い時代となっている．

V. 課題

助産師のコア・コンピテンシーは「生命の尊重」「自然性の尊重」「智の尊重」の3つを基盤としている（日本助産師会）．とくに，産み育てることそのものが難しいものと捉えられがちな現代において「女性が本来持っている力」を尊重するという，助産師ならではのヘルスプロモーションの視点は，古くて新しい個別の発見に繋がる可能性がある．助産師が，女性と胎児・新生児の身体と感覚を代弁できるだけの知識と経験をもって自らの提供する助産ケアを，革新というよりは，どのように再発見・再構築していけるかが求められている．

文献

日本助産師会．助産師のコア・コンピテンシー．http://www.midwife.or.jp/midwife/competency_index.html (2019.10.20)